

2015年8月  
1082号

# 万葉

Manyo

一冊の会 編集部

〒160-0015 東京都新宿区大京町5

(一冊の会研究室)

## 赤松良子先生の誕生日お祝いの会 若手メンバーの学びの報告 (その1) ～一冊の本から始まって、世界へ羽ばたく～

赤松先生のお誕生日お祝いの会の様子は、万葉 1081 号でお伝え致しました。先生の前で櫻華塾での学びを若手メンバーが発表致しました。今回はその内容をお伝えいたします。

櫻華塾グローリア部光 G の赤田美香子です。東日本大震災発生直後から本の贈呈活動を行い、その責任者を務めさせて頂きました。一冊の会の原点である「一冊の本」に込められた想い、そして教育にかける想いを、大槻会長から伺い、次世代に引き継いでいく決意を致しました。

「一冊の会」が子どもへの読み聞かせを初めて行ったのは、半世紀前の 1965 年でした。イソップ物語やかぐや姫を子どもに読み聞かせ、そこから学んだ感動を近所の人々に分かち合ったことから始まり、次第に輪が大きくなりました。そして、「私が読んで楽しかった本、あなたにも読んで欲しい本」のキャッチフレーズをかかげ、僻地の分校への献本活動を始めました。このことが、この度の東北支援の時に、どの団体よりもいち早く本を送る「献本活動」をすることにつながりました。

献本活動は海外にまで及び、1989 年 8 月には、当時のソビエト連邦のバイカル湖近くの小学校に大槻会長が持参し、お返しに本をお預かりしました。また、サハリンに取り残され 40 年近く祖国に帰国出来なかった日本人の皆さんがいると聞き、その足ですぐにお訪ねして、120 冊の本を贈りました。同じ年の 9 月から、アメリカ合衆国ヴァージニア州にある、3 つの公立小学校で日本語の授業を実験的に行うこととなり、そのために必要な小学 1 年生の教科書の援助を、当時、全国学校図書協議会会長であった酒井 悌<sup>やすし</sup>氏から求められ、1 年前の教科書 600 冊を、子ども達に意義を説明し復習をしてから寄贈いたしました。輸送は全日空が賛同し、無料で引き受けてくださいました。その際に、ソ連の小学校からお預かりした本と、それにサハリンに取り残された日本人から後日頂いた本も添えました。アメリカの小学校からも、お礼にと本をお預かりし、それをサハリンに贈り、3 つの国を本で結びました。その年の暮れ、当時ブッシュ大統領夫人であったバーバラ・ブッシュ女史から、アメリカとソ連の間に冷たい鉄のカーテンがあると言われた中、日本とアメリカとソ連を結ぶ民間外交を行ったことに對し、礼状が届きました。

子ども読書年である 2000 年には、国際子ども図書館が、国立国会図書館法に基づく我が国唯一の国立の児童書専門図書館として開館しました。国立国会図書館には子どもは入ることができませんが、これを記念し、献本活動を続けてきた「一冊の会」の会員の子どもたちとその保護者が、国立国会図書館にご案内いただきました。

一冊の会の子ども達は、自分が楽しかった経験を広めていこうという、「見てこよう！聞いてみよう！語り合おうよ！友好の輪」のキャッチフレーズのとおり献本活動を受けつぎ、また次々と海外に羽ばたき活躍しております。



国立国会図書館正面玄関にて 来賓の方々と子ども達

そして2011年、東日本大震災がおこりました。一冊の会は震災直後から支援を始め、96回になります。資生堂の化粧品や日用品だけでなく、津波で何もかもが流されてしまった方々の心の糧になればと、一人一冊の本を被災地に贈ってまいりました。一冊の本が持つ力を知っていればこそ、こんなにも早い段階で心の糧となる支援ができたのだと思います。私達が忘れてはならないことがあります。大槻会長は、赤松先生はユニセフの会長なので、先陣を切って東北支援をなさるので、遠慮してお声をかけることをためらったそうです。いよいよ出発の時、赤松先生に「行ってまいります」とご挨拶をすると、お財布をあけてなんと札束全部を調べもせず「さあ、持っていきなさい。道中気を付けて」と送り出してくださったのです。会長と小山さんは、赤松先生の温かさに感謝して、どんなに大変でも赤松先生が見守っていてくださると勇気づけられ、4年半自分の車で走り続けることができたそうです。

3・11直後の4月、奥村仙台市長と会談の折り、親を亡くした子どもの教育について話がおよび、親を失った為に高校、大学への進学を断念しなければならない事態がおこる事を大変心配されており、一冊の会ではいち早く、津波で親を亡くした子ども達への教育資金援助運動を開始しました。今まで、仙台市と相馬市に援助をいたしました。さらに、被害にあった学校の子供達への図書カード贈呈、また津波で図書室を流されてしまった学校へ本の贈呈を行ってまいりました。そして、早い復興を祈り、成長が早い桐の一種である、雪香プロスパーポローニアの植樹活動も開始し、先月6日には青森県八戸市に6か所目の植樹をいたしました。雪香プロスパーポローニアは本当に成長が早い木で、2~3年もたてば3m以上になります。環境が良いと5年で直径30cmに成長します。子供たちが、木と共にすくすくと成長する姿を思い浮かべて復興記念樹として、市長、教育長、校長先生ご出席のもと植樹をしております。この行事は津波のあった海岸の市町村全てに何年かかっても実行予定です。

このような活動ができましたのも、今まで培ってきた50年間の活動があったからであり、一冊の会の先輩方の実践力に感謝を申し上げます。私は赤松先生の前で、この活動の灯を決して絶やしてはならないという決意を、発表させて頂きました。50年の節目の年である今年、赤松先生はじめ諸先生方の前で改めて表明をできる幸せをかみしめております。

一冊の会設立より様々な出来事がありましたが、逆境をバネに時の流れを素早くキャッチして、その時に求められるものに対応し続けてきたのが「一冊の会」の特徴であり強みです。「一冊の会」はこれからも国連の活動に合わせ、その伝統を受け継ぎつつ進化して参ります。そのためには、私達の世代が、今までの伝統を知った上で活動をしていかなければなりません。まだまだ先輩方に助けられてばかりですが、時代に合った活動を模索しながら一冊の会の活動を継続していきますことを、ここに決意します。そしていつか、私達が語り部となり、また次の世代に受け継いでまいります。

以上のように発表させていただき、福島みずほ参議院議員は「雪香プロスパーポローニアが早く成長するように、また東北の復興が早く進むことを祈っています。赤松先生におかれましては、雇用、男女平等、人権、子ども、平和と多岐に渡る分野で活躍されておりますが、一冊の会も一冊の本から様々な活動へ発展していったのが分かりました。」と温かく語られました。赤松先生からは「戦後70年の今年は難しい節目の年だが、今は超党派でしっかりやっついていかなくてはいけない時です。」と激励のお言葉を頂きました。

この大切な節目となる時代に生きていることの重みをかみしめつつ、決意を新たにした1日となりました。

文責 グローリア部 赤田美香子

